コラム

教科と生活から学力をとらえ直す

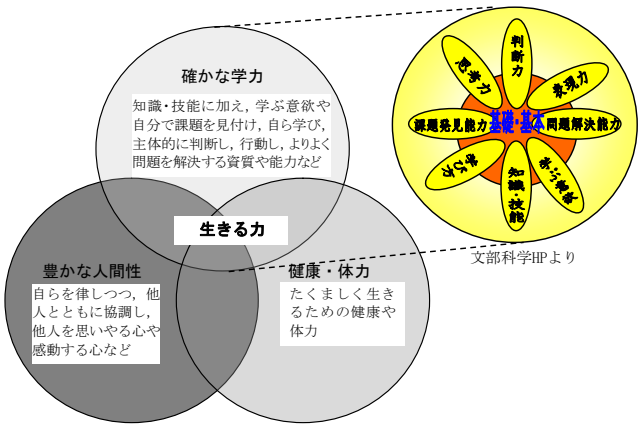
―教科学力と生活学力をセットで―

2015.04

学力のとらえ方は，様々ある。どれも正しい。平成１６年１０月の中教審答申では，確かな学力とは，次のように定義されている。

> 「知識や技能はもちろんのこと，これに加えて，学ぶ意欲や，自分で課題を見つけ，自ら学び，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたもの」

また，当時はこれに加えて，豊かな人間性と健康・体力の３つを生きる力の要素と(右図)考えられた。これからの社会を生き抜くための人間力とも言われた概念であり，今でも納得できる。これらの３つの要素は，いつの世でも必要なものであり，求められる力である。



文部科学HPより

ある時期，求める「確かな学力」を，

○　知識や技能（基礎的・基本的事項）

○　確実に機能する思考力や判断力，コミュニケーション能力など

○　自ら学び続ける意欲や態度

としたが，全国学力学習状況調査の影響か，数年前からＡ・Ｂ問題をいかに早く確実に解けるかが学力向上のメインとなり，いつのまにか結果順位の方が気になる現状もある。この調査問題には，求められている力が凝縮されているとも言われ，課題のある問題には徹底した個別の指導・支援も必要とされてきた。

しかし，例えば，Ａ・Ｂ問題を解くだけの自己完結型の学習は，教科内容は身に付くが，他者との学び合いを通して身に付く社会性や人間関係調整力などが希薄になりそうである。次期，学習指導要領の柱になりそうなアクティブ・ラーニングやコミュニティ・スクール，小中一貫教育などの新しい教育の台頭からも，この学力のとらえ方を再考する必要性を感じている。

端的に言うと，教科で身に付く教科学力と生活の中で身に付く生活学力を常にセットで考えていくことが重要であると思う。これまでも，本物を学習材として持ち込んだ授業を数多く見てきた。この本物は，人であれ事象であれ，事実として子どもたちの前に提示される。事実としての本物から問いを見付けたり，根拠を求めたりする中で，事象や事象中の人間，また学習仲間と必然的にかかわり合うことになる。必然的にかかわり合いは，共感を得たり，時には反論をもらったりと能動的な学びを呼び込む。ここには，子どもにとって，実感や納得もあれば，気がかりや更なる疑問も浮上するだろう。本物と正対することで，事象中の人間や子ども同士で，どうにもならないことへの対処法や折り合いのつけ方，目上の方への接し方など，自然と学ぶことができる。

これからは，小中学校の９年間を一貫した能動的な学びに変えるとともに，地域社会の中で学ぶことを大切にする生活学力の向上に力点を置きたい。その裏には，小中一貫教育カリキュラムづくりを忘れまい。（芝）